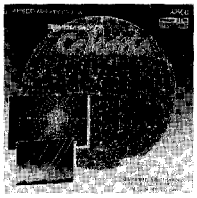

日本天文学会 監修

Celestia

1994年6月発行

日立アプリケーションシステムズ

8900円，CD-ROM 1枚

ソフトウェア

お薦め度

☆★★★★

始めにお断わりしておかなければならないことは，評者はいわゆるパソコン少年ではない，むしろ大型機化石という分類があればそれに入る方だろう．しかしCD-ROMの書評においても，本と同じく内容がより重要であることが分かって安心した．

このソフトウェアは次の6機能から成る．

1）天球の概念．次の2つの機能を理解するための説明が，動画・文字・音声で与えられる．

2）天球シミュレーション．星図を表示するだけではなく，地球を離れて視野中心の方向へ前進・後退して見える星空が表示される．

3）今日の星座．「今日の」となっているが任意の日時・場所に対して，星座と月・惑星が表示されるので，まるでミニプラネタリウムである．

4）写真集．木曽観測所などで撮影された天体写真が64枚入っている．（またもやスライド集からの複製である．原版からデジタル化して高画質を得る折角の機会だったのにと残念である．この件に関して木曽観測所長から天文学会理事長に抗議文が送られたと聞いている．）

5）用語集．Windowsのヘルプのように，次々とページを開いて読める天文用語の解説である．

6）クイズ．星座の形から星座名をあてるゲームと，天文学の質問に5択で答えるクイズ．

CD-ROMのカバーなどからみて，2）に最も力点が置かれているように見え，また問題も多いので，これを中心に取り上げる．実は評者もこの種のプログラムを作りたいと夢見たこともあったが，データが揃わなくて断念したことがある．このCD-ROMでは，参考文献としてSky Catalogue 2000.0 vol. 1があげられている．一般に有名なこのカタログの初版は，しかしデータの信頼性に強い批判があった．改訂版は未見であるが，いずれにしても距離などのデータの取扱いは慎重を要する．用語集の中で，例えばリゲルを引くと距離1040.0光年とある．このような超巨星の距離には多分2倍以上の不正確さがあるとみるのが常識と思うが，有効数字5桁とは！　正しい知識の普及には，その「あやうさ」も含めて伝えることが大事で，これでは「もうすべて分かりきった」かのような誤解を与えて恐ろしい．

さて売りものの宇宙旅行で，例えばヴェガの方向に25光年ほど進んでみても，距離が近くなっているのに見掛けの等級が明るくならない．このような補正なしでは，地球から離れるほど総体的に見掛けの暗い星しか残らなくて天球が淋しくなることは当然である．限界等級は6等であるので，空間密度で大部分を占める太陽より暗い主系列星は，たかだか数十光年までしか含まれない．

一方，移動距離についてのヘルプ画面を見ると，50万光年を「宇宙の果て」と思えとの趣旨の注意がある．これでは，遙か50万光年までこの機能が保証されているように思わせるし，逆にたった50万光年で「宇宙の果て」とは恐れ入るし，双方の意味で誤解を招く．例えば銀河中心の方へ3万光年も行くと闇黒しかない．銀極方向へ5万光年行って地球を振り返っても，中心核も渦状腕も見えない．端的に言ってウソの風景を提供しているのだが，何の断り書きもないことだし，素直な読者はどう受け取るだろう．

思うに我々の知識はこの種のプログラムを作るほど十分でないのに，無批判なデータ信仰的態度が数々の誤解を招く産物を世に送り出した．その上に日本天文学会が「監修」というお墨付きを与えた．一会員として憤激に堪えない．

西村史朗（東京都在住）